

秋 月 観 暎  
あき づき かん えい

学位の種類 文 学 博 士  
学位記番号 文 第 26 号  
学位授与年月日 昭和50年 2月27日  
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 浄明道の基礎的研究

論文審査委員 (主査)  
教授 金 谷 治 教授 愛 宕 松 男  
教授 佐 藤 圭四郎  
教授 楠 正 弘

論 文 内 容 の 要 旨

緒 論

幾多の外来宗教を含め、中国の歴史の上に登場する宗教の数は決して少なくないが、一貫して中国の歴史と深い係わりをもち、中国宗教史の骨格を構成するのは、儒・仏・道の三教であると云って過言でない。屢々問題とされる儒教の宗教的性格を、如何に見るにもせよ、これを除外して中国宗教史を論じえないことは、何人と雖も否定しえないところであろう。中国宗教史を儒仏道三教交渉史として、総合的に捉えようとする研究が試みられて、既に久しい年月が経っており、概ね三教が出揃う後漢末以降、強力な政治権力を差挟んで、相互に形而上・形而下の両面にわたって、複雑、多彩な接触を繰り広げる三教の約2千年に及ぶ交渉関係の輪郭は、ほゞ明らかにされるに至ったと云える。然しながら、その内部に眼を転ずるならば、史上、密接な交渉をもった仏教と道教、儒教と仏教の關係に、豊かな研究の照明が向けられてきたのに対し、比較的接触の機会に乏しかった儒教と道教の交渉關係には照明が及ばず、未だ全く闇に覆われた部分が少なくなく、これが中国宗教史の体系的・総合的把握を妨げる大きな障害となっていると云ってよい。

ところで、中国史上の一大変革の時期である唐末五代ころを境として、儒仏道三教の錯雑した交渉関係にも、一つの大きな変化を生じており、まず華々しく繰り広げられる三教をめぐる論争において、三教の所説の間にある鋭い対立点を止揚せんとする調和論が、三教々団相互に闘わされる論難を抑えて優勢を示す一方、秘かに進行する三教の教説の摂取・交流の面においても、相互の対立的・閉鎖的な態度が緩和され、それぞれ教団の隔壁を越えて融合し、庶民の社会的・精神的生活を導く新たな実践の運動を展開するに至っており、対立から融和に向う大きな方向の転換のあることを確認することが出来る。このような新しい三教融和の傾向は、まず宋代の新道教の所説の中に具体化され、明代に至って成熟する居士仏教、陽明心学、並びに善書等において、美事な結実を遂げるに至っている。

叙上の如き三教融和の思潮が頂点に達する明代の文人屠隆は、三教の鼎立の理論の中で、道教を浄明道によって代表せしめ、これを儒道の調和を実現すべき媒体として捉えることによって、三教間の対立を融和しており、また同じく明代の陽明学右派の指導者高攀竜は、右派の所謂東林党では「仙家として許旌陽の教えが最も正しいと考えられている」ことを語っており、当時、中国の思想界において、浄明道が儒教的な忠孝の道徳的实践を重視する特異な仙家として、将又、疎隔の関係にある儒・道の教説を連絡し、三教調和思潮のかゝる内面的な空隙を充たすべき道教々派として、頗る重視され、且つ高く評価されていた事実を明らかに物語っている。

果たせるかな、第43代天師である明の張宇初は道教の源派を挙げ、正一教・靈宝教・上清教と並べて、許真君の浄明道を道教の主要教派と見做しており、また「雲笈七籤」にも、許遜をもって道教相承の第36代に列しておるなど、許真君を祖師とする浄明道が、近世道教々団内部において、極めて重要な地位を占めていた事実を明瞭に窺わしめるものがあるのである。

然るに、従来、この浄明道に対する学界の関心は頗る低く、ごく最近に至って、漸く一部、国の内外に、その重要性が認識されるに至ったことは、独りこの研究に携わってきた者として、誠に欣びに堪えないところであるが、拙稿を除き、寡聞ながら未だ専論のあることを知らないのが現状である。

かねてより道教史研究に携わってきた筆者は、中国宗教史学における浄明道研究の重要に着目して以来、これが究明に聊かの努力を傾けてきた。僻遠の地にあつて、独り未開拓の分野に斧を入れる作業は、思うにまかせぬものがあるが、このたび機会をえて、既発表の論考を補訂し、更に4篇の新稿を加え、「浄明道の基礎的研究」と題し、一本に纏めたのがこの提出論文である。

次に論文の目次を掲げ、その章節の順序に従って、論文内容の要旨を記すことゝしたい。

## 目 次

### 緒 論

## 第一章 許真君伝考

### — 浄明道研究 序説 —

#### は し が き

- 第一節 許真君記伝資料とその編年的分類
- 第二節 許真君記伝類の資料批判とその整理 (一)
- 第三節 許真君記伝類の資料批判とその整理 (二)
- 第四節 許遜仙道教団史の展望

## 第二章 西山と旌陽県

### — 許遜仙道教団の歴史地理 —

#### は し が き

- 第一節 西山と逍遙山の位置と関係
  - 第二節 西山の名称の来歴
  - 第三節 「西山紀遊記」と「西山行程記」について
  - 第四節 晋代における旌陽県の所在
- ## 第三章 「逍遙山万寿宮志」の資料的検討と玉隆万寿宮の沿革

#### は し が き

- 第一節 「宮志」諸本刊行の経緯
  - 第二節 重修本と重輯本の比較
  - 第三節 「宮志」記伝資料と道蔵記伝資料との関係
  - 第四節 玉隆万寿宮の沿革
- ## 第四章 許遜教団の形成とその発展

#### は し が き

- 第一節 祖師許遜の修道と浄明道教団の形成
  - 第二節 初期許遜教団の構成とその活動
  - 第三節 中世における許遜教団の発展とその系譜
- ## 第五章 宋代の許遜教団と許遜信仰の実態

#### は し が き

- 第一節 宋王朝と許遜信仰
  - 第二節 宋代許遜教団の新教法
  - 第三節 宋代士人の許遜信仰観と祭祀の実態
- ## 第六章 浄明道の成立とその相承

#### は し が き

- 第一節 浄明道開創の顛末とその伝授
- 第二節 元代文人官僚の浄明道観
- 第三節 明清代における浄明道の相承
- 第四節 許遜仙道教団における伝教系譜 4 則

付 論 浄明道と明代の宗教・思想

- 第一節 浄明道と道教各派の交渉
- 第二節 浄明道と陽明学派の接触

第七章 浄明道教学考

— 儒仏道三教關係を中心に —

は し が き

- 第一節 浄明道と儒教倫理
- 第二節 浄明道の救済と悟道
- 第三節 浄明道における三教融合

第八章 道蔵本功過格と許遜教団

— 酒井・吉岡両博士の争点によせて —

は し が き

- 第一節 道蔵本功過格の成立をめぐる争点の整理
- 第二節 許遜教団における功過思想の発展
- 第三節 功過格の所説と許遜教団の倫理教説
- 第四節 玉隆万寿宮会真堂における功過格の作製

第九章 太微信仰と功過格

— 道蔵本功過格をめぐる 2・3 の問題 —

は し が き

- 第一節 占星思想と太微信仰
- 第二節 北斗九星説と太微信仰
- 第三節 太微帝君の神格
- 第四節 上清派と功過格思想の発展
- 第五節 太微信仰と許遜教団の教説

第十章 近世中国宗教史上における浄明道の役割について

は し が き

- 第一節 新道教の出現と浄明道
- 第二節 三教融合思潮と浄明道教説

### 第三節 功過格の流行と浄明道

以 上

猶、提出せる本論文の体裁は上中下3巻に分冊されており、その内容は

上巻 第一・二・三章（資料篇）

中巻 第四・五・六章、及び付論1篇（教団篇）

下巻 第七・八・九・十章（教理篇）

によって構成されていることを付記しておきたい。

## 第一章 許真君伝考

### 一 浄明道研究序説 一

本章は最初の基礎作業として、蒐集しえた許遜教団の祖師許真君の14種にのぼる記伝類を整理し、まずこれによって許遜教団の歴史的輪郭を明らかにせんとしたものであり、

第一節において、これら記伝の大まかな成立年代を、許真君のもつ2つの封号を手係りとして判定し、予め3つの年代グループに分類、

第二節はこの目論見の上に立ち、確定年代をおさええた若干の記伝を軸として、許遜教団の発展に伴って展開する許真君伝承の演変の跡を、整理・検討することによって、諸記伝成立の年代、並びに記伝相互の継授関係を解明したものであり、

第三節において、初期記伝類の藍本と推定される3種の散逸記伝の復原的考察を試み、これと現存記伝の継授関係を系統的に明らかにした。

第四節は、以上の基礎作業の結果に基づき、許遜教団の歴史的発展について概括的な考察を加え、これを4期に区分する序説的展望を試みたものである。

## 第二章 西山と旌陽県

### 一 許遜教団の歴史地理 一

第一節は許遜教団の本拠の位置を南昌府新遠県の西山に確定し、更に玉隆万寿宮の在る逍遙山と、この西山の地理的關係を明らかにした。

第二節は、変転する西山の山名の来歴をたどり、西山の名称の発生の時期を見定めると共に、「西山記」その他の関係資料の成立年代について考察を加えた。

第三節は、この西山の模様を詳しく記す最古の資料である、宋代の「西山紀遊記」並びに「西山行程記」を紹介し、これを対照しつつ、当時の西山の地理を明らかにし、その繁栄の状況を窺見したものである。

第四節 許遜の別名とされる「旌陽」とは、東晋の県令であった彼が最初に赴任し、生祠された

県名であるが、許真君記伝はすべて、その所在を四川省徳陽県の地に当てて、疑うところがないが、これは訛伝であり、湖北省の枝江県の地をもって、これに当ててべきことを立証し、併せて訛伝の由って来たところを考察したものである。

### 第三章 「逍遙山万寿宮志」の資料的検討と玉隆万寿宮の沿革

第一節 本研究の進捗過程において探索することをえた「逍遙山万寿宮志」の編輯・刊行の経緯、並びに板本の種類について検討し、

第二節において、現存の2本、即ち乾隆重修本と光緒重輯本を比較検討し、両本の資料的価値を見定めたものである。

第三節は「宮志」所収の記伝資料と、関連する道蔵所収記伝との成立関係を考察したもので、正統道蔵未収の明代資料を除き、概ね浄明道教団成立後の改竄の手が加えられている事実が明瞭となった。

第四節は、許遜教団の歴史を通じ、一貫して本山の地位を保ち続けてきた玉隆万寿宮の発展の沿革と、宮観の実態を、歴代の祭祀・信奉の資料を透して究明したものである。

### 第四章 許遜教団の形成とその発展

本章は、前三章において試みてきた予備的・概括的な検討の結果を基礎として、許遜教団の開創より唐末—第1・2期—の展開を考察したものであり、

第一節は、浄明道の所謂浄明忠孝の教説の発祥を、許遜の際におく浄明道の正統的祖師伝の記述は、教団成立後、廻行的に仮托された伝承に過ぎぬことを立証し、この時期における許遜教団と、後期の浄明道を歴史的に峻別すべきことを主張して、所謂「許遜仙道教団」の概念を新たに提示した。

第二節は、初期許遜教団の使徒とも称すべき12真君の記伝を中心に、教団の構成と社会的性格を考察したものであり、特にその濃厚な血縁的性格は、その後の浄明道の特色をなす孝道の所説、出家否定の思想等と基本的に繋がるものであることを指摘した。

第三節に、開創以来の隆退をへて、唐代に中興される許遜教団の沿革を、零細な資料を点綴して窺見すると共に、その間における伝教の系譜を、法師胡惠超を中心に構成した。

### 第五章 宋代許遜教団と許遜信仰の実態

第一節は、宋王朝に至って徐々に進展する国家的な許遜信奉の様態を叙述し、更に

第二節において、俄に信仰の深まる北宋末以降—第3期—において、初めて浄明・忠孝の教法が出現している事実を論証し、その所謂浄明法のもつ呪術的性格を明らかにして、やがてこれを

清整して出現する第4期の浄明道と混同すべからざることを主張し、恰も激しさを加えた金齊侵入による社会的混乱と政治的危機が、この新教法出現の背景にあることを推定した。

第三節は、宋代における許遜信仰の実態の究明を試みたもので、まず宋代の代表的人物である王安石・朱熹らの玉隆万寿宮、或は許遜信仰に対する評価と対応の姿勢を明らかにする一方、玉隆万寿宮の詳細な祭礼資料を紹介して、民衆社会における熱烈な許遜信仰の実態を考察したものである。なお、こゝに利用した王安石の「重建旌陽祠記」、及び祭礼資料に、今後、各方面の研究に貴重な材料を提供することとなるものと思われる。

## 第六章 浄明道の成立とその相承

第一節は、道蔵資料に宮志所収の記伝類を加えて、浄明道開創の顛末を具体的に跡づけ、その成立年代を確定すると共に、その後を嗣ぐ黄元吉及び徐異の人物と、相承の経緯を明らかにした。

第二節は、許遜教団教法の清整・脱皮を果たして成立した浄明道が、当初から元代の文人官僚層の尊崇を集めた模様を、黄元吉と交渉のあった趙世延ほか5名について検討し、彼等をして、急速にこれに傾倒せしめるに至った理由を分析することによって、逆に元代における浄明道出現の意味を探ろうとしたものである。

第三節においては、浄明道の3代徐異以降、明初より清初に至る嗣教の系譜を明確にすると共に、その嗣承者に認められる巾広い教派的交流と、社会的活動を通じて、この時代における浄明道教団の動向を窺見したものである。就中、浄明道の相承者が、何れも明代道教界の教学的・行政的指導者、或は王室出身者によって占められていることは、浄明道の社会的地位の著しい向上を示唆するものとして注目すべきものがある。

第四節は、許遜仙道教団資料の中に、4種の異った嗣教系譜の存在する事実を指摘したものであり、再三に及ぶ変革を経て、発展せる許遜仙道教団の展開過程における系譜の拡張と、その間における教団の伝教者に対する評価の推移を反映するこの系譜が、教団における道統観の歴史的変遷を窺うべき貴重な材料であることを明らかにした。

## 付論 浄明道と明代の思想・宗教

こゝでは明代の思想・宗教と浄明道の接触、並びにその影響関係に注目し、まず

第一節において、道教界の主流をなす全真教と浄明道の交流を、また

第二節にあっては、明代思想界に華々しい活動を示す陽明学派に対する浄明道の影響を窺見したものである。未だ文字通りの管見に止まるが、玉隆万寿宮を舞台に展開される道教各派の自由な接触交流と、陽明心学左右両派に及ぼせる浄明道教学の影響には刮目すべきものがあり、特に後者は明代思想史研究のうえに、深められるべき重要な課題を提示することになるものと思われる。

## 第七章 浄明道教学考

### 一 儒仏道三教関係を中心に一

第一節は儒教と浄明道の教理的関係を考察したもので、浄明道が儒教の忠孝の道徳を受け容れながら、儒教の倫理実践における宗教的内面性の欠除を厳しく衝く、強い批判的摂取の態度に、頗る注目すべきものがあることを指摘した。この点は、やがて陽学左派を中心に展開する体制批判的思潮と関連のうえからも検討さるべき余地があろう。

第二節は、浄明道經典に説く、天尊の思寵による救済の所説が、大乘仏教の所謂誓願による衆生救済の論理の上に立って構成されている一方において、開祖劉玉の語録は、靈妙至甚の靈験を専ら非人格的な道理の発現として捉え、道との合一によって真に至るべきことを説く所説の違反に注目し、

第三節において、この浄明道の救済と悟得の2つの道筋が、何れも忠孝の真践実履を必須の要件となし、更に到達すべき窮極の境位を、不老不死・無上清虚の仙境を説く浄明道の教理的構造の中に、所謂三教融合の最も具体的、且つ典型的な教説を見出しうることを主張した。

## 第八章 道蔵本功過格と許遜教団

### 一 酒井・吉岡両博士の事点によせて一

第一節は、近世中国社会において、広汎な流行を示した功過格類の嚆矢をなす、道蔵本功過格の作製教団をめぐる、展開されてきた両博士の論争点を整理したものであり、

第二節において、両説の得失を批判検討し、更に宋代の許遜教団の所説の中に、上清派の三元応報説の影響をうけて発展する功過思想が成立していることを立証して、道蔵本功過格が許遜教団において作られることの強い可能性を指摘すると共に、

第三節には、該功過格に「忠」の教説が説かれていないことを理由に、許遜教団の作製を否定する所説に対し、この功過格の出現に先立つ玉隆万寿宮の決戦において、金軍の撃滅を誓う宋軍将兵の中に、強烈な「報国」の精神の昂揚が認められるなどの事実を指摘し、功過格が「忠」を説かず、「国の為」の実践を打ち出す時局的背影を解明しつつ、更に

第四節において、該功過格の撰者「会真堂又玄子」の居住せる「会真堂」が玉隆万寿宮に実在した事を立証して、該功過格が許遜教団の本山において作製されたことを主張した。

## 第九章 太微信仰と功過格

### 一 道蔵本「太微仙君功過格」をめぐる2・3の問題一

本章は道蔵本功過格が許遜教団において作製されたと言う主張に続いて、この功過格の降授者とされる太微仙君と許遜教団の教説との関係を教理的に突き止めようとするものであり、まず

第一節において、中国古代天文学における太微垣の占星思想の中に、太微天宮の天神が人間の罪過を考校すると云う思想の存在していることを明らかにし、

第二節において、六朝道教における北斗九星信仰の展開を辿り、その第九星の名称が、太微帝君として宋初に定着している事実を突き止め、

第三節において、更にその神格を検討した結果、太微帝君が既に功過の禍福を主宰する神とされていることを確認、

第四節において、上清派教学の中における功過格思想の発展を考察し、所謂立功補過格が唐末五代ごろに成立していることを明らかにし、最後の

第五節において、この上清派の教学を受け継ぐ許遜教団において、人間の功過を司る神とされてきた太微帝君が、新たに太微仙君の名称をもって、功過格信仰の主神とされてゆく道筋を考察した。

## 第十章 近世中国宗教史における浄明道の役割について

本章は叙上の立論を踏まえながら、近世中国宗教史上に認められる3つの主要な動向、即ち新道教の出現・三教融合思潮の進展・功過格類の流行の上における浄明道の役割を論じたものであり、

第一節は、浄明道の母胎である許遜教団が、新道教三派の出現に一步先んじて、教法の革新に踏み切り、続いて浄明道がこれを更に清整して、近世的性格をもつ漸新な教説を樹立していることをもって、浄明道を所謂新道教の一派と見做しうることを説き、

第二節において、浄明道が六朝初期以来の所謂三教調和の諸思潮の中において、儒・仏、道・仏の縁親の関係に比較して、頗る疎隔の関係におかれてきた道・儒の結合を確立することによって、初めて文字通りの三教融合の教説を、その教理構造の上を実現した教派であると云えることを主張し、更に

第三節においては、近世に流行する功過格類の中であって、最も重視された道蔵本功過格が許遜教団の手によって作製されているのみならず、この功過格の所説が引続き、浄明道の教説の中に説かれていることを明らかにすることによって、上記の三動向の何れにあっても、浄明道が主導的地位を占めている事実を確認し、道教史は勿論のこと、近世中国宗教史の展開の上において、浄明道が極めて重要な役割を果たしていることを論述したものである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、道教の一派として中国近世において勢力をもった浄明忠孝道について、その起源と

しての許遜教団から浄明道としての成立に至るまでの展開のあとを文献学的に究め、かつその教義の特色を儒仏道三教一致思想のうえに立つ悟道と救済との総合から成る新道教として明らかにしたもので、浄明道研究の専論として学界最初のものである。

第一章許真君伝考では、始祖とされる許遜の伝記14種に検討を加え、許遜に対する尊号の有無や許遜周辺の人間関係の記述の違いなどによって、それらを4種の年代に分類し、それにもとづいて浄明忠孝道の成立をみるまでのその発展のあとを概観して、本論文の基礎をおくとともに、概括的な全体の展望を与えたものである。

第二章西山と旌陽県では、教団の本拠としての南昌府などについて歴史地理的考察を行い、第三章では本山の万寿宮についてその資料の吟味を通して沿革の歴史を明らかにしている。第四章許遜教団の形成とその発展、第五章宋代許遜教団と許遜信仰の実態、第六章浄明道の成立とその相承では、教団の歴史的発展のあとを第一章での展望の線にそって詳細に追求し、祠廟的信仰の段階から北宋末期（十二世紀初）の国難のなかで忠孝の提唱がはじめて行われた趣きをその社会的背景とともに明らかにし、やがて元初（十三世紀末）の劉玉真らによる浄明忠孝道の成立の状況を究明して、明代の宗教・思想と浄明道との関係にも及んでいる。

第七章浄明道教学考は、教学の内容に深い考察を加えたもので、その主知的悟道の面と他力的救済の面とを総合した趣きを明らかにしている。そしてこの点に、時代的な三教融合の立場をふまえて、士大夫と民衆との両者の好尚に投じた新道教としての性格が顕著である、と結論する。

第八章・第九章では、功過格の問題を扱ってその信仰の形成発展をあとづけ、浄明道がそれに果たした役割を証明し、第十章では以上の論究をとりまとめて、近世中国宗教史上における浄明道の役割の大きいことを強調して、全体の結論としている。

以上を概括すると、本論文は浄明道の歴史的教學的研究の専論として前人未踏の分野を開拓したもので、零細な資料を集めて犀利な批判のもとに構築された論考として、著者の努力と力量はまず以って高く評価できる。特に本論文のすぐれた点としては、まず第一章の許遜伝記の分析に示された、文献批判を通して許遜教団の歴史的変遷をみるための基盤を導出するという、その着実な実証的方法であり、また、第七章で、その教学内容を構造的に明らかにしたうえ、特に儒教道徳を宗教的立場から批判超克するという形で道教信仰の体系中にとりこんだ趣きを実証的に明らかにした点である。浄明道の勃興した社会的背景や、宗教教団としての社会的機能などの面では、著者の留意にもかかわらず、なお不十分の感を免れないが、これには一面資料の制約も考慮

されるべきであろう。

なお参考論文は道教の基本問題のいくつかをとりあげたもので、著者のこの方面の力量をうかがわせるに十分である。

以上によって、本論文の提出者は文学博士の学位を授与されるに十分な資格を持つものと認められる。